

# 「白蛇伝」における白娘子像の変遷

## —アニメ映画『白蛇：縁起』の小白を中心に—

### The Evolution of the Bai Niang Zi in the “White Snake”: Focus on Xiao Bai in the Animated Film “White Snake (2019)”

陳 媛 媛

Chen Yuanyuan

(日本女子大学大学院人間社会研究科 相関文化論専攻博士課程後期)

#### 要 旨

2010年以後、中国では国家政策や市場環境の影響により、中国の民間伝説や神話に基づいて作られた中国製アニメーション映画（以下アニメ映画とする）が再びブームとなった。今回のブームは、従来のそれとは異なり、現代的価値観を取り入れるなど従来の物語と異なる趣が出ている。それらのアニメ映画の中でも、中国四大民間伝説であり、現代まで伝承され続けている「白蛇伝」を原作とするアニメに焦点を当てることとした。そこで、2019年公開の『白蛇：縁起』について、登場人物や物語など、現在に至るまでの「白蛇伝」との比較をしながら、大ブームとなった要因を考察していく。また、登場する人物の描写がどのように変化したかについて、その作品が製作された当時の時代背景などを手掛かりとして分析するとともに、物語の展開や細部においてどのような変化をもたらしたのかを、「白蛇伝」における中心人物である「白娘子」を中心に分析する。

#### [Abstract]

Due to the political strategy of the Chinese government and the market environment, the animation films which based on Chinese folk legends and myths have become popular and popular in China. This animation boom has several different parts from traditional stories, such as incorporating modern values.

This paper will focus on the anime based on the traditional story “White Snake” which is the one of the four greatest Chinese folk legends. I discuss the factors that caused the huge boom of the movie “White Snake” which was released in 2019, comparing with the characters and story of the traditional “White Snake” stories. In addition, I will analyze the difference of depiction of the characters, especially focusing on the “Bai Niang Zi”, considering the historical background at the stories distributed.

#### はじめに

2010年以後、中国では国家政策や市場環境の影響により、国民が徐々に伝統文化に対して関心を示し始めたため、中国の民間伝説や神話に基づいて作られた中国製アニメ映画が再び注目されブームとなった。今回のブームでは、従来のそれとは異なり、伝統的な物語を単にアニメーションの形式で再話するのではなく、現代的価値観を取り入れ、従来の物語と異なる趣が出ている。それらのアニメ映画の中でも、『白蛇：縁起』は現代に即した展開と優れた製作側の技術により、消費社会における現代的価値観と伝統文化との融合と発展の良い参考モデルとなった。本稿では『白

蛇：縁起』に注目をし、その原形であり現代まで伝承され続けている「白蛇伝」の登場人物や物語と比較しながら、登場する女性がどのように変化し内容が発展したかについて分析していく。

## 1. 『白蛇：縁起』の制作背景

鄧小平による1978年の改革開放政策以後、都市経済体制改革や責任生産性などの導入により中国経済は最悪の状態を脱し、2001年のWTO加盟や2008年夏季オリンピック開催地に北京が選ばれるなど、いわゆる高度経済成長期を迎えた。中国政府は自国の文化発展を非常に重視しており、2013年には中国共産党第十八届中央委員会第三次全体会議において、「社会主義文化強国の構築、国家の文化力の増強」<sup>1</sup>という方針を打ち出している。2017年、習近平国家主席は第十九回全国代表大会にて「中国伝統文化の創造的転換と革新的発展を促進する」<sup>2</sup>と明示した。これは、中国の文化事業における今後の方向性を示したものであり、2022年の中国共産党第二十回全国代表大会においても習近平国家主席は「中国語と中国の物語体系の構築を加速し、中国の物語をうまく語り、中国の声をより広く伝え、信頼でき、愛おしく尊敬される中国のイメージを現出させる」<sup>3</sup>と、文化発展の必要性を強調した。生活水準の向上に伴い、一般市民の間においても文化への関心が高まっていた。

2015年のアニメ映画『西遊記之大聖帰来』は『西遊記』を原作としており、孫悟空の「大鬧天宮」から500年後、お寺の小僧である江流児が偶然に五行山の下に封じられていた孫悟空を救い、互いに寄り添いながら冒険の旅をするという設定である。当初は冷淡で狂暴だった孫悟空が、江流児の優しさと勇敢さに心を動かされ、自信と勇気を取り戻し、自己救済を果たす物語である。『西遊記之大聖帰来』の中国における興行総収入は9.56億元<sup>4</sup>であり、2015年アニメ映画の興行収入のランキング1位となった。

2016年に公開されたアニメ映画『紅き大魚の伝説』は『山海経』、『莊子』逍遙遊篇など中国の古典や伝統文化を取り入れていることから、世界から注目された。映画では、神秘的な海底世界に住んでいる海棠花の成長を司る少女椿が恩返しのために、人間の少年である鯢の魂を蘇らせるという物語である。

上記の複合的な背景から、アニメ製作会社である追光動画は2019年1月11日に、アメリカのワーナー・ブラザーズとの共同制作で、中国の民間説話である「白蛇伝」を原作としたアニメーション映画『白蛇：縁起』を公開した。『白蛇：縁起』は、伝統的な「白蛇伝」をベースにしているものの、主人公である白蛇の小白とその恋人である人間「許仙」の前世である許宣との愛を語ったオリジナルのストーリーである。この映画は上映後に高い評価を受け、インターネット上で「白蛇ブーム」を巻き起こし、特に中国の若者の大きな支持を得た。また、『白蛇：縁起』は、中国国内だけでなく、海外においても上映された。日本では、2021年に劇場公開され話題となり、多くの注目を集めた。

「白蛇伝」は中国民間四大伝説<sup>5</sup>の一つであり、中国民間文学研究の代表作として多くの人に知られ、長期にわたって中国民間文化に深い影響を与えている。中国において、白蛇が女性に化けて人間世界に暮らしているという説話に関する最も古い記録は唐代の唐の伝奇小説『博異志』巻四五八「李黄」<sup>6</sup>である。明代(1368-1644)馮夢龍(1574-1646)の「白娘子永鎮雷峰塔」は「白蛇伝」の最初の完成形だと考えられており、時代とともに各媒体を通じて語り継がれてきた。賀学君によ

ると、白蛇伝の物語は中華民族の精神文化の中で形成され、文化的背景、登場人物の性格、風俗習慣などの面で、鮮明に民族的個性を表している<sup>7</sup>。

## 2. 映画『白蛇：縁起』について

### 2-1. 物語の展開

『白蛇：縁起』は、従来の「白蛇伝」とは異なり倒叙で描かれている。物語の冒頭では、秘境で500年間仙術の修行をしている白蛇の小白と青蛇の小青が登場する。その修行中、小白が執着心に囚われ、解脱できない状況が描かれている。その状況の真相を知っている小青は、彼女の記憶が封印された法器である簪を用いて、500年前の許宣との深い情愛を小白に思い出させる。

500年前、小白は蛇母に命じられた皇帝の家来である国師の暗殺に失敗し、記憶を失った。偶然にも小白は蛇取りである許宣に救われ、自分の記憶を取り戻す為に許宣と一緒に行動することになり、お互い助け合いながら距離を縮め恋に落ちた。最後の国師との対戦では、許宣が自分の命を犠牲にし、小白を救った。小白は最後の力を使い、許宣との記憶を簪に封印したため、妖力がなくなり記憶を失ったのである。

小青のおかげで記憶を取り戻した小白が転生した許仙<sup>8</sup>と西湖の断桥で再会するアニメの終盤のシーンは、本来の「白蛇伝」の冒頭である「断桥相会」の場面であり、視聴者にこの映画が「白蛇伝」の主人公たちの前世の物語であったことを明示する構成となっている。映画では、二人の前世における深い愛を強調し、彼らの愛をさらに宿命的なものとして描いている。

原典である「白蛇伝」の最初の完成形だと考えられているのは、明代(1368-1644)馮夢龍(1574-1646)の「白娘子永鎮雷峰塔」であるが、それには白蛇と許仙の前世に関する描写はなかった。しかしながら、「白蛇伝」の発展を振り返ってみると、描き方は異なるものの、実は各時代において前世の因果という設定が共通して存在している。

1738年清代(乾隆三年)黄图珌の『看山閣楽府雷峰塔』の第一折「慈音」<sup>9</sup>が、初めて紙媒体に残された前世の因果に関する描写だと考えられている。許宣は如来の座前で鉢を持つ侍者であったが、白蛇と宿縁があるため人間に生まれ変わり、宿縁に結着をつけることとなった。しかし、許宣と白蛇の宿縁については詳しく語られなかった。

1771年清代(乾隆三十六年)方成培の『雷峰塔伝奇』においても、黄图珌版と同様に宿縁については詳細に語られなかったが、方成培版の白蛇は西池王母の蟠桃園で蟠桃を盗み食い、それによって悟りを得て峨眉山で修行する蛇仙となったという過去が語られた。また、白蛇が下界に降る理由についての描写では、黄图珌版のように露骨に俗欲に堕ちるという描写と異なり、方成培版では縁がある人を探しに行くという理由によって白蛇は人間界に興味を持ち、修行を放棄し下界に行ったとなっている。

中華民国時代の夢花館主の『白蛇全伝』では、これらの過去作と違い、白蛇が人間界に行った理由が「報恩」<sup>10</sup>であるということにされ、白蛇と許仙の宿縁についても詳しく描写された。白蛇は金慈聖母の助言を受け、命の恩人である許仙に恩を返す為に人間界に降りた。この作品において、「報恩」が白蛇の修行にとって必要な要素であると定められた。

### 2-2. 物語の背景と発生地

「白蛇伝」の時代背景が宋代であることを踏まえ、『白蛇：縁起』では唐宋八大家として有名な柳

宗元(773-819)の名作『捕蛇者説』<sup>11</sup>が引用され、時代背景は晩唐となっている。また、物語の舞台設定は晩唐時期の「永州城」であり、「捕蛇村」は「永州之野」と記されている。

柳宗元の『捕蛇者説』では、蛇狩りである蔣氏の独白を通して、統治階級の苛政が毒蛇よりもさらに残酷な現実を暴露し、過酷な搾取の下で苦しむ村人の生活を反映している。実際の歴史的背景として、唐の中期以後、藩鎮の割拠や朝廷内部の紛争などによって、中央政府の財政は危機を迎え、税金の負担が重くなり民衆は苦しんでいた。805年、柳宗元は王叔文を中心とする革新運動の失敗により、永州の司馬に左遷された。永州での10年間で、柳宗元は苛税や強制的な税金徴収によって民衆の生活が苦しめられていることを実感しており、自分の作品を通じて統治階級が民衆の苦勞を理解し、民の為に政治をすることを望み『捕蛇者説』を作った。

映画『白蛇：縁起』では、「捕蛇村」の村人たちが蔣氏と同様に蛇狩りで生計を立てていることはそのまま引用したが、異なる点もある。まず、蔣氏がいる衰退しつつある村とは異なり「捕蛇村」に貧富の差はなく、村人たちは親切であり人間関係も良好で、子供たちが自由に遊べる桃源郷のように描かれている。次に、映画では、蛇を捕まえる理由は薬作りではなく、皇帝の仙術の修行のためとなっている。実際に安史の乱(755—763)の後、唐が衰退期に入り、統治者が不老不死を求めて煉丹術に夢中になっていたという歴史的事実を取り入れた事が窺える。

このように、『白蛇：縁起』は古典を引用しながら、現実の歴史的背景を取り入れることで、統治階級と庶民階級、人間と妖怪の対立を、作品が作られた時代の価値観に適するように作品内容を再構築しており、かつ中国政府の中国伝統文化における創造的転換と革新的発展を促進するという方針にも準拠している。

### 3. 『白蛇：縁起』における白蛇の描写と、従来の作品との比較

白蛇の物語は唐代まで遡ることができ、現在まで多くの変化を経て伝えられている。物語の変遷とともに「蛇女」という女性像は異なっており、その差異は社会と時代における女性に関するイメージの変化を反映しており、その時代の背後にある女性の意識を浮き彫りにしている。

#### 3-1. 唐代における白蛇

唐の伝奇小説『博異志』巻四五八「李黄」では、白蛇に関する物語は現在の「白蛇伝」と大きく異なり、人間の男が美女に変身した白蛇に誘惑され、最後には殺されて死んでしまうという物語であった。このように描かれているのは、色欲に溺れることの危険性を警告するためのものであり、「女禍思想」を反映していると考えられる。唐代では経済が非常に発展しており、政治や文化も開放的になっていたため、女性が積極的に政治に参加して外部との接触も自由になっていたものの、女性の立場は変わらず男性の従属物のままであった。そのため、女性が力を持つにつれて、男性は女性が自分の立場を脅かす存在であると感じ、女性を妖魔化して人間と区別することで、自分が情欲によって犯した過ちを正当化したいという考え方が示されたのである。例えば、柳宗元の『河間伝』では、良家の女である河間が強要され、誘惑に負けて淫婦になるという物語を通じて、当時の男性中心の社会において不貞な女性は当然のごとく恥ずべき存在であり、儒教が推奨する倫理道徳基準に反する人物として軽蔑されるべきだとされている。

#### 3-2. 宋代における白蛇

宋代(960-1279)では、商業の繁栄と共に、社会が更に発展していた。その当時、世俗性に溢れ



る話本小説はより一般民衆の間に広く伝わった。宋代の話本『西湖三塔記』では、白蛇の物語の展開や登場人物がより豊富になった。話の内容は、白蛇、ラッコ、黒鷄の三匹の妖怪が人間の男奚宣賛に害を与えようと試みるものが、最後には道士の奚真人によって西湖の石塔に封じられるというものである。唐の白蛇と比較すると、宋代の白蛇は唐代から引き続き、妖怪の凶悪残忍な本質は変わらなかったが、ただ人を喰うだけではなく、退治する人と戦える妖力を持っているという点が加えられた。このことは、当時の社会が伝統的な男尊女卑の社会構造であったものの、経済と社会の発展とともに女性の社会的地位が高くなり、従来の概念に対抗する力がある程度持つようになった事を反映している。南宋洪邁（1123-1202）の『夷堅丙志』卷十四「王八郎」では、女性が自ら離婚を決断した後、商業を始めたという話が記載されている<sup>12</sup>。また、南宋の判決文などを記載した『名公書判清明集』では、複数の女性が離婚、再婚したとの記事があった。それらの資料から、当時の女性は差別される存在であったが、女性の自意識が高くなり、自分の意志で行動できるようになった<sup>13</sup>。

### 3-3. 明代における白蛇

明代の「白娘子永鎮雷峰塔」では、以前の物語とは異なり、白蛇は人間味を帯びた描かれ方をしている。白蛇である白娘子は薬局の当主である許宣に一目惚れし、積極的に彼に付き添う一方、自分を封じようとする和尚である法海に反抗し、幸福な生活のために大胆かつ勇敢に行動した。白蛇のイメージは、本来の人を害する妖怪から、人間と妖怪の両方の側面を持つ存在へと変化した。明代の中期以後、中国の社会や経済には大きな変化が起こっており、市民階級の拡大と共に、民主的な思想が芽生え、個人としての価値が徐々に社会に認められるようになった。李伯重（1997）は「明代初期では、朱子学的思想に基づき、朝廷は女性に対する多くの制限を設け、特に三綱五常や三従四徳といった観念を強化した。それは、当時の社会思想が伝統的な男尊女卑であったものの、社会や経済の発展に伴い女性が綿紡績の生産における主な労働力となり、労働の生産効率や報酬が男性の農業労働による報酬よりも高くなったため、女性の経済的地位と社会的地位が向上したからである」<sup>14</sup>と述べている。張江（2006）は、「明代の江南地方では、女性の収入や持参金が家庭において重要な役割を果たしていただけてだけでなく、女性の教育水準も高く、家庭や社会活動において夫に大きな支援を提供することができた」<sup>15</sup>と述べている。実際に、明代の統治者は女性の教化を非常に重視しており、この時期の女子教育に関する書籍の編纂、出版は厳格に管理された。明太祖朱元璋（1328-1398）は、即位後大臣である朱昇に命じて『女戒』を編纂させ、後宮の女性が政治に干渉することを明確に禁止した。また、明成祖朱棣（1360-1424）は即位後、女性の行動を規制するための指導書である『古今列女伝』を編纂した。明代の女子教育は女性の行為を規制する一方で、客観的には女性の啓蒙教育も達成しており、社会全体における女性に対する関心がさらに高まっていくこととなった。

### 3-4. 清代における白蛇

清代（1644-1912）には、「白蛇伝」は戯曲の形で更なる展開がなされており、白蛇は許宣への感情が報恩となり、「求草」<sup>16</sup>「水斗」<sup>17</sup>などの展開により、物語の内容がより豊富になった。清代は、中国最後の封建社会の王朝であり、男尊女卑や三従四徳などの思想制限が頂点に達し、女性の地位や境遇に大きな影響を与えていた。特に清代の婚姻制度は女性を束縛する最大の要素だと窺える。清代では「父母之命令、媒酌之言」を重んじていた。法律では「結婚はすべての祖父母または

父母が決定し、祖父母や父母がいない場合は、その他の親族が決める』<sup>18</sup>と定められた。また改嫁や再婚は恥と見なされ、さらに女性に貞節を守ることが強く奨励された。しかし、清代には、養蚕業や織物業の急速な発展に伴い、女性が織物などの商品生産の重要な役割を担うようになり、収入を得る事ができるようになったため家庭内での地位が向上した。そのため、この時期には沿海地域や経済発展の地域において、女性による封建制度への反抗事例が次々と発生した。紀昀(1724-1805)の『閱微草堂筆記』には、娘が親によって準備された婚姻に反抗するために、死を装って逃げたという話があった。その他、清代の広東地方には「金蘭契」という独特な女性の組織があった。これは、強制的な結婚制度に対して抗議する未婚の女性たちによる集団であり、当時の画報や小説に多く登場していた<sup>19</sup>。

清代中晩期以降、国内外の問題が相次ぎ、統治者は領土の維持や軍事力の発展に専念していた。また、官僚制度が腐敗し、官吏たちは娯楽を重んじるようになったこともあり、戯曲が発展して民間における重要な娯楽となった為、多くの物語は戯曲の形で上演されていた。なお、小説と比べ戯曲は民間の芸術形式であったこと、戯曲の芸人はもともと一般の民衆の一部であったこともあり、その演技や戯曲の内容は一般民衆の心理に寄り添うものとなっていた。そのため、清代の戯曲において、白蛇の人間性がより強く表現されるようになり、勇敢で伝統的な倫理観に反抗し、自由な愛情を追い求める女性となった。

### 3-5. 中華民国以後における白蛇

中華民国成立以後、社会は戦争などで混乱していたが、五四運動の展開と共に多くの詩人、小説家は古典を引用しながら当時の社会問題を取り入れた作品を数多く世に送り出した。傅学敏(1937-1945)によると、「戦争が始まってからは、民族意識や国家意識を高揚させるために劇を旧来の内容から変革することとなった」とある<sup>20</sup>。1929年、高长虹(1898-1954)の戯曲である『白蛇』が発表された。『白蛇』では、白蛇は愛の象徴であり、「自然の娘」<sup>21</sup>である。彼女の息子は「新生の力」<sup>22</sup>であり、未来の希望として描写されていた。

1943年の端午節<sup>23</sup>の直前、四維平劇社の李紫貴らの依頼によって田漢は「白蛇伝」を改編し、戯曲『金鉢記』を創作した<sup>24</sup>。しかし、当局が「反仏教の嫌疑」<sup>25</sup>を理由に取締りを行い上演禁止となったため、初公演は1947年となった。『金鉢記』の白蛇は、民族意識を持つ愛国主義者として描かれた。『金鉢記』の第五場「盗銀」では、当時の戦争の現実を暗示するため、県官が倭寇と内通するという展開が組み込まれた。白蛇は、銀が倭寇との裏取引による不正なものであると知ると、敵と通じた売国奴の県官を叱責した。原文では「やはり、この悪い役人は敵と繋がっていた。我々が来たことで、その悪い役人に教訓を与えることができた」とある<sup>26</sup>。また、第十一場「療疫」では、日本人が毒を散布し疫病を起こしたが、白蛇の高明な医術によってそれを解決した。

また、マスメディアの登場と発展により、近代的な白蛇の物語が映像化され、『義妖白蛇伝』、『荒塔沈冤』などの映像作品が登場し、蛇女がより多様に描かれるようになった。映画やテレビドラマの中には、清代の蛇妖のイメージを踏襲しているものもあるが、時代の発展に伴い、より大胆な翻案が登場して清代とは明らかに異なるキャラクターが現れるなど、女性問題に対してより近代的で深い探究が示されているようになった。

1939年楊曉忠監督の映画『荒塔沈冤』において、杭州総兵の娘である素珍は、無実の罪を着せられたため侍女の小青と共に逃亡し、途中で許仙という公子と出会い、結婚して一子をもうけ「夢

蛟」と名付けた。しかし、僧侶の法海が許仙に対して素珍と距離を取るよう唆し、彼女を雷峰塔に幽閉した。数年後、夢蛟は科挙で状元の位を得て母の素珍と再会したが、素珍は夢蛟が去った後、塔から身を投げて命を絶つという話である。『荒塔沈冤』では、素珍は蛇妖ではなく、誹謗中傷された一般女性として描写された。このように「白蛇伝」に現実的な物語を脚色することで、女性の家父長制や封建社会に対する抵抗意識が表現されているのである。

### 3-6. 中華人民共和国成立以後における白蛇

中華人民共和国成立以後、イデオロギーなどを含めた演劇改革が行われ、労農兵を主役とする文芸を新中国文芸における正しい方向となった。1951年、周恩来は「関于戯曲改革工作的指示」の一文において、「演劇は、新しい愛国主義精神を発揚し、革命闘争や生産労働における英雄主義を鼓舞することが最優先である。侵略や圧迫に反抗し、人民の正義と善良な性格を称える演劇を奨励し、普及させるべきである。一方、不道德で有害な行為を称賛し、労働者を侮辱する演劇は禁じられるべきである」<sup>27</sup>と強調した。1954年、周恩来が「白蛇伝」を観劇するにあたり、田漢は、『金鈴記』の第五場「盗銀」<sup>28</sup>といった白蛇の欠点を削除することで、白蛇のイメージをさらに美化した<sup>29</sup>。このような背景において、1955年、田漢（1898-1968）の『白蛇伝』が出版された。1955年版は「水斗」について詳しく描写され、白蛇の反抗精神を強調することにより、白蛇を革命的な精神を持つ女性像にしている。

鄧小平による改革開放政策が実施され、九十年以後に始まる経済成長に至るまでは、国民の文化に対する関心は薄かった。経済が成長するとともにカラーテレビが普及し、テレビドラマが人々の生活の娯楽に入るようになった。

1992年に放送された『新白娘子伝奇』は、当時の視聴率一位を獲得するなど社会に大きな影響力を及ぼし、現在に至るまで多くのファンに支持され続けており、その後の『白蛇伝』の改編作にも大きな影響を与えた。『新白娘子伝奇』の主人公である白素貞は、以前から描かれている白蛇と同様に容姿が美しいのは言うまでもなく、新たに包容力も兼ね備えた賢明な女性として描かれた。また、ドラマの最後で白素貞の息子が結婚した後、許仙、法海、小青、白素貞と一緒に飛仙するというハッピーエンドな結末としたことも、大衆文化の要求に適切に対応していたと言えよう。

「白蛇伝伝説」は中国の伝統文化において最も重視されている伝承であることから、2006年に第一期の無形文化遺産の一つとして認定された。同年に中国の国営テレビで放送されたドラマ『白蛇伝』における主人公の白素貞は淑やかであり、従来の白蛇のイメージと一致していた。

2011年の映画『白蛇伝説』では、主人公白素貞が率直な性格に変わったほか、彼女は質素な服を着ており、裕福な家に住むのではなく許仙と茅屋で貧しい生活を送っていた。それは当時の社会、特に一部の80年代生まれの結婚適齢期の若者の婚姻観を反映していた。この時期の若者は素朴で純粋な愛を追い求め、借金もせず、贅沢もせず、複雑な物事や手続きを伴わない質素な結婚の形によって自分たちの愛の純粋さを証明できると考えていた。同時代の2009年テレビドラマ『蝸居』、2011年テレビドラマ『裸婚時代』もこのような社会現象を反映していた。

2018年のドラマ『天命～白蛇の伝説～』は「白蛇伝」の派生作品であり、白蛇である白夭夭は従来の白蛇のイメージと違い、お茶目で少女の可愛さを持つキャラクターであった。この時期の中国社会は女性の社会進出が更に進んでおり、多くの女性は家庭や職場で新たな困難に直面し、精

神的な解放や心理的な満足を求めている。その心理的ニーズに応えるため、昨今では女性の成長を語る「大女主劇」が爆発に増えている。『天命～白蛇の伝説～』の主人公白夭夭は数々の試練を乗り越え、天命を受け、妖帝に就き、妖界を統治し、仙界と妖界の争いを鎮めるために力を注いだ素晴らしい女性として描かれた。しかし、ドラマの中において、白夭夭は恋のために自己を犠牲とし、許宣のために雷峰塔で500年間修行したという展開は、従来の白蛇のイメージと一致している。

### 3-7. 『白蛇：縁起』の小白

「白蛇伝」が長期にわたって伝えられる中で、また中国社会が封建的思想から革新的思想へと移行変わる過程において、女性は徐々に伝統的な従属物から平等で独立した主体へと変わり、蛇女も家父長制的社会背景から目覚めて男性と同じように理想と希望を持ち、美しい愛を追い求め、幸福を追求する権利を持つようになった。しかし、蛇妖のイメージがどのように変化しようとも、伝統的な「白蛇伝」の中では、許仙という男性が白蛇の生活の中心であり追求の対象であったため、白蛇が強い力を持つとともに、良妻賢母として許仙のそばに寄り添うことしか出来ず、許仙との愛の中ではより大きな自己価値を示すことが出来ずにいた。映画『白蛇：縁起』は「白蛇伝」に基づいて製作されているが、原作の人物像の描写を変化させることで新たな物語を作り上げた。

明代の馮版以後、白娘子は淑やかな若い婦人の描写がなされるようになった。原文では、「頭には喪服用の髪飾りをつけ、黒い髪の中にいくつかの白いかんざしを挿し、白い絹の服を着て、下半身には麻のスカートをはいている」<sup>30</sup>と記されており、白娘子の服装や髪型などから彼女が未亡人であることが示されている。白娘子は妻として、夫の事業を全力で支えるだけでなく家事も行なうなど、「妖」である白娘子は「人」である許仙に近づき、人間性を理解し、人間の生活を送れるよう努力をした。

一方で『白蛇：縁起』の小白は、明るい目、絹の白衣、秀麗な姿を持つなど外見は従来の白娘子の描写と一致しているが、髪は宝髻で服は羽衣であるなど少女のような可憐さが加えられており、白蛇は従来の良妻賢母の若い婦人のイメージから少女へと変化している。そのほか、小白は従来の男を追いかける女性から、自分に与えられた任務を一人で果たす独立した女性となっている。そのため、小白と許宣が恋に落ちたときも、彼らはそれぞれ独立しており、小白は妖族の世界で自分の目標と任務を持ち、阿宣は人間の世界で自分の生活を持っており、両者ともに誰かの従属物としては描かれていなかった。彼女は「妖」であるからといって「人」より劣っているわけでもなく、責任感があり、情に厚く、仲間を守ることができる妖怪として描写されている。

製作側としては、小白が受動的な存在から能動的な存在へと自己成長を遂げることで、現実における女性の社会的地位の変化を暗示したいのではないかと考えられる。従来の女性は受動的な地位であり、妻や母など社会や家庭など作られた枠組みから脱出できずにいたが、小白のように外的要因に影響されようとも、思い悩むことを恐れずに自分のやるべきことを模索して自己実現をしようとしている姿は、現代の女性が直面している境遇と重なるのではないだろうか。

## 4. 『白蛇：縁起』における他の登場人物の描写と、従来の作品との比較

### 4-1. 許宣（許仙）

唐代の白蛇物語では、男に関する描写がほとんどなかった。宋代の『西湖三塔記』で登場し士大



夫子弟奚宣贊は許宣の前身だと考えられる。彼は誘惑に負け、臆病な人である。

明代の「白娘子永鎮雷峰塔」における主人公の出会いは、伝統的な才子佳人小説であり、男主人公である許宣に関して詳しく描写された。小説では、「ハンサムな若者」<sup>31</sup>、「普段から大人しい人」<sup>32</sup>から、許宣は顔立ちが整っており、控えめな性格であることがわかる。また、家が裕福ではなく、小さい頃に親が亡くなり、二十二歳で親戚の李将仕の薬局を手伝っているという平凡な市民である。白娘子と出会った時、許宣は白娘子の美しい容姿に惹かれたが、白娘子の正体を知った途端に恐怖と不安に陥った。その後の作品においても、許宣という人物は基本的に同様の描き方を踏襲しており、臆病な書生として描かれていることが多い。

1955年、田漢の『白蛇伝』では、許仙の臆病者というイメージを変え、白娘子に対する愛が強調された。端陽節「劝酒」<sup>33</sup>の展開は従来の「白蛇伝」と異なり、許仙自らが白娘子に事実を知っている旨を伝えた上で、妻が妖怪でも愛するということを告げた。原文では「あなたが妖怪であろうとなかろうと、私はあなたを愛している」<sup>34</sup>と書いてある。また、許仙は白娘子が妖怪という事実を知った時には動揺したが、その後すぐに動揺したことを反省し、白娘子から逃げずに運命を共にした。原文では、法海によって金山寺に連れられた許仙が「家は捨てられても、妻の恩情は捨てられない」<sup>35</sup>と後悔している。その他、原文では「今日は心が晴れやかだ。人を食べるのは法海であって、妻ではない。金の鉢を打ち碎き、賢い妻を解放する」<sup>36</sup>とのことから、許仙は白娘子と同じ立場に立ち、法海を代表とする封建勢力に反抗している事が窺える。

物語を全体的に見ると、白娘子と許宣の恋愛の展開は、全て白娘子が主導している。また、封建的な倫理に反抗し、勇敢に愛を追求する描写は主に白娘子に焦点を当てている。

一方、『白蛇：縁起』の許宣は、従来からの臆病な書生のイメージから脱却し、自由自在な侠客のような人として描かれていた。小白が自分のことを妖怪だと思い出し、彷徨っている時でさえも、許宣は「妖怪」という小白の存在を拒絶せず、さらに小白と一緒にするために自ら人間の身分を捨て、最も力の弱い妖怪となり、最終的には愛のために自己犠牲を厭わなかった。彼は妖怪としての小白の心境を理解し、愛を通じて小白を啓蒙し、彼女が蛇母の「人間が敵である」という固定観念や、人と妖怪の違いに基づく倫理観に対して反抗するように促した。許宣は白蛇の追求を受動的に受け入れるのではなく、小白との愛の主導者と推進役として描かれた。

#### 4-2. 小青

伝統的な「白蛇伝」において、小青は脇役として白蛇の侍女や妹のような役割を担っていた。彼女には妖怪の部分が残っているが、性格は天真爛漫であり物語の展開において重要な役割を果たしている。唐代の伝奇『博異志』の「李黄」で登場した青服の老婆は、白蛇が人間の男へ害を加えるのを手助けしたことから、小青の前身だと考えられている。「李黄」では青服の老婆に関する描写は非常に少なく、彼女は白蛇の指示に素直に従って、人間の男を白蛇の罠に誘導していた。

明代の『白娘子永鎮雷峰塔』では、青蛇は青い服を着ている白娘子の侍女青青として描かれている。しかし、青青は青蛇ではなく、千年も修行した青魚であった。物語では青青は素直に白蛇の指示に従っていたが、青青に関する描写は少なかった。

清代の戯曲『雷峰塔伝奇』では、小青は800年以上修行した蛇妖であるが、法力が白蛇に及ばないため、賭けに負けて白蛇の侍女になったとある。この作品での青蛇は以前の作品の性格とは異なり、反抗的な精神を持ちつつも率直で忠実であり、物事を賢く適切に処理できるキャラクター

であった。『雷峰塔伝奇』で登場した小青は、白蛇の頼れる仲間のような存在であった。清代の弾詞『義妖伝』では、青蛇と白蛇における姉妹のような深い絆が描かれるなど白蛇と青蛇の主従関係は確立され、青蛇の物語における重要さも高くなっていた。

1955年、田漢版の小青は強い反抗精神と革命性を備えた反抗者として描かれていた。物語の最後にある、小青が多くの人を率いて雷峰塔を倒して白娘子を救出する場面は、人民の団結心と忠誠心を称賛するものであり、当時の政治的な意味合いが暗示されている。これまでの青蛇は、白蛇の代弁者として白蛇の性格の補充する役割であり、白蛇の妖の一面を表していた。

1993年、映画『青蛇転生』は李碧華の小説『青蛇』を基に改編され、香港で公開された。映画は、南宋時代の中国を舞台にし、青蛇である小青を主役に据えた映画作品である。小青は自分の欲望に従っており、白蛇より反抗的に描かれた。彼女は人間や愛に対する好奇心から許仙を誘惑し、白娘子と対立することとなった。また、高僧法海に対して興味を抱き、彼を誘惑した。映画の終盤では、青蛇は白蛇の死後、許仙の裏切りや、善悪を見分けることができない法海を見て、人間に対して失望し、許仙を殺して人間の世界から去っていくことを決断した。映画では小青という人間と妖怪の狭間を彷徨っている存在を通じて、最初から最後まで「人間であることの意味」を視聴者に問い続けている。

『白蛇：縁起』の小青は従来の侍女の設定ではなく、小白の妹弟子として登場しており、正義感を持ち、信義を重んじる性格として描かれた。小白が蛇族に疑われた時も、小青は無条件に小白のことを信じており、彼女の潔白を証明するために自分の命も顧みず、蛇母から「烈陽断魂鱗」を受け取り、三日間以内に小白を連れ戻さなければと死ぬという約束をした。映画の様々な場面において小青と小白の深い感情が強調されていた。当初、小青は極端な考えに影響されていたものの、小青の外見の変化を通じて、自身に発生した衝撃的な出来事から自我を確立して成長していく様子が伺える。

500年前の蛇族にいた時の外見は、小青の髪はポニーテールで濃緑の衣装と甲冑をまとった女戦士の姿である。その時の小青は、蛇母に洗脳され、人間に対して極端な憎悪を抱き、常に暴れて人首蛇身に変形し、顔にも手にも青い鱗が付いていて妖怪の特徴が強かった。その後、小青は欲張りな蛇母の裏切りにより、妖力を吸収された。500年の秘境での修行により、小青は淡緑の羽衣を纏って髪を頭の上に包んだ落ち着いた女性の姿となった。中国古代の小説において、妖怪が修行を経た後の外見や服装の変化は、その身分や力、修行の状態における直接的な描写であり、物語の展開においても重要な象徴となっている。通常の妖怪らしい動物の特徴から人間の姿への変化は、妖怪がより高い修行の境地に到達したことを象徴している。

小青の服は強さを感じる甲冑から柔らかさを感じる羽衣に変化し、服の色も深緑から浅緑へ変化していることから、五百年の修行を通じて彼女の妖気が薄くなり、心も穏やかになったことを暗示していると考えられる。このように、『白蛇：縁起』の小青は従来の青蛇と異なり、最初は衝動的だったが次第に自我を確立していき、白蛇の指示に従うだけでなく、自分の思考や判断で行動するようになった。

#### 4-3. 『白蛇：縁起』における独自の登場人物

『白蛇：縁起』には、原作と異なる人物像と展開を増やすことにより、蛇族の首領である蛇母と狐妖である宝青坊主という原作にはない登場人物が加えられており、原作と異なる趣を出している。

蛇母は、蛇妖の首領として他の蛇族を抑圧しつつも、人間から弾圧される存在であったため、極端な思考を持っていた。蛇母はメドゥーサのような蛇の頭など邪悪な雰囲気を感じられるように描写されており、彼女の危険性と狡猾さが表現されている。彼女は蛇族の生存と存続を守るために、蛇妖たちを率いて、国師による弾圧に立ち向かい、命を懸けて戦う勇敢なリーダーのように見えるが、実際には小白に達成不可能な暗殺任務を強要したほか、蛇族を統治するために「人間は皆悪である」という偏見を蛇妖たちに植え付け、彼らが人間に対して無意識的に憎悪を抱くように仕向け、人間と妖怪との対立を一層深める原因を作った張本人でもある。この映画における蛇母の「悪」の描写は、本当の「善」の貴重さを際立たせると同時に、観客に「善悪」の認識に対する価値観を問うているのではないだろうか。

宝青坊主は、本名は不詳、妖怪の法器を製作する宝青坊の持ち主であるため、宝青坊主と呼ばれている。映画では、国師を破った法器である簪を改造し、人間の許宣を妖怪に変えた凄まじい妖力を持っており、物語の展開に寄与する謎が多いキャラクターである。宝青坊主は可憐な少女の顔と邪悪な狐の顔を持っており、話しながら二つの顔を自然に切り替えることができる。宝青坊主が少女の顔を見せる時には、魅惑的な目線、しなやかな体つき、軽やかな足取り、そして開けそうなキャミソールのようなミニドレスを身にまとっている。それは中国の伝統文化において、狐の妖怪が男性を誘惑する為に女に化けた時のイメージと一致している。また、声が甘く、悠々自適な態度で何事も自分と何の関係もないかのように振る舞うため、彼女の本当の考えを見抜くのは難しい。一方で狐の面を見せるときには、狐のように足を曲げて跳ねるかのよう移動し、老婆のような声で発話内容が鋭いなど、妖怪が凶悪で狡猾だというイメージに相応しい様態に変化する。

製作側は二つの面を通じて、現代社会が偽りや欺瞞に満たされている社会であるということを隠喩しているのではないだろうか。それは、女性が社会で生き延びるために真の自分を隠し、幾つもの仮面を作り出して自己防衛や利益のために異なる顔を使い分けていることが背景にあるだろう。

## まとめ

これまでの「白蛇伝」の発展を振り返ると、白蛇のイメージは時代の変化に伴い移り変わっていることを示している。唐代において、白蛇は人間の男を殺す凶悪残忍な妖怪として描かれていた。宋代に至り、白蛇は退治する人間に対抗する力を持つようになった。明代では、白蛇は人間味を帯びた描かれ方をしており、人間と妖怪の両方の側面を持つようになった。清代において、白蛇により人間性を加えており、勇敢で愛を追い求める女性となった。民国以後、当時の社会問題を取り入れたため、白蛇は民族意識を持ち、反抗的な女性になった。新中国成立初期では、当時の国家政策を踏まえ、白蛇を革命的な精神を持つ女性像にしていた。1990年以後、ドラマでは、白蛇は理想的な美德を備える女性として描かれていた。近年、女性の社会進出が更に進んでおり、白蛇は数々の困難を乗り越え、素敵な女性として描かれた。

映画『白蛇：縁起』では、従来の白蛇が許仙を恋慕するという伝統的な展開を改編することで、従来の男女関係における力関係を打破した。そのため、小白は良妻賢母の枠組みから脱却し、独立した主体として物語に登場している。彼女は、妖族からの排斥と国師からの追跡に対して立ち向

かいながらも記憶を取り戻しつつ、情愛に溺れず自分のやるべきことを明確にし、自我の成長を遂げた。中国の伝統的な恋愛物語における男性キャラクターのイメージ像から脱却した。映画の許宣は臆病な市民ではなく、小白が妖怪であっても偏見を持たず、小白が抱える問題を共に解決するなど、小白との愛の主導者となっていた。その他、原作にはない蛇族の首領である蛇母と狐妖である宝青坊主も加えられており、原作と異なる趣を出している。

このように古典を再構築することで新たな物語を作り上げ、中国において最も人気のある古典キャラクターの一人である白娘子に新たな性格を付与したことは、評価すべきであろう。

## 後注

- <sup>1</sup> 「建设社会主义文化强国，增强国家文化软实力」王光荣「提昇国家文化軟実力の着力点」『光明日報』2020年4月21日
- <sup>2</sup> 「推动中华优秀传统文化创造性转化，创新性发展」朝戈金「創造性転化創新性発展」『光明日報』2018年3月29日
- <sup>3</sup> 「加快构建中国话语和中国叙事体系，讲好中国故事，传播好中国声音，展现可信，可爱，可敬的中国形象」『构建中国話語和中国叙事体系 提升国家文化軟實力』『人民日報』2024年2月1日02版
- <sup>4</sup> <https://piaofang.maoyan.com/rankings/year>
- <sup>5</sup> 中国民間四大伝説とは、「七夕伝説」、「孟姜女」、「白蛇伝」、「梁山伯と祝英台」である。「四大伝説」という概念は、1980年代に中国に浸透した。賀学君『中国四大伝説』浙江教育出版社、1995年。
- <sup>6</sup> 李昉ほか編『太平広記』中華書局 1961年、pp.3750-3752。
- <sup>7</sup> 賀学君（注5）に同じ（pp.198-203）
- <sup>8</sup> 許宣は、明代馮夢龍の「白娘子永鎮雷峰塔」で登場した人物である。清代の『義妖伝』以後、許宣は許仙という名前に変わった。
- <sup>9</sup> 黄国珖「看山閣楽府雷峰塔」傅惜華『白蛇伝集』中華書局、1960年、p.282。
- <sup>10</sup> 梦花館主『白蛇全伝』岳麓書社、2006年、p.61。
- <sup>11</sup> 『捕蛇者説』あらすじ：「永州の郊外には、不思議な毒蛇がいて、これを薬にすると多くの難病が治るというので、皇帝の命を受けて侍医が税金の代わりにその蛇を年2回徴収することを告げた。蒋氏という村人も、三代にわたって蛇取りをしてきたが、祖父と父親は毒蛇に噛まれて亡くなっていた。三代目の蒋はこの仕事を12年間しており、何度か危うく死にそうになった事もあった。柳宗元は蒋に同情し、もう蛇取りをしなくとも直接税金を納めることができるように朝廷に口添えすると、蒋に伝えた。しかし、蒋は泣きながら、それでは今よりも困窮してしまうと言った。蒋一族は60年間ここに住んでおり、隣人たちが畑の作物や家にあるものを売り払って税金を納めるのを見てきた。それに加えて、税金から逃れるために逃亡して餓死した人、病で死んでしまった人も多く見てきた。その為、蒋は蛇取りの仕事のおかげで生き延びることができており、地元の人々より自分は幸運だと述べた。柳宗元は蒋の話の聞いて「苛政猛于虎」という孔子の言葉を引用し、今日の税金制度が毒蛇の毒よりも強烈であることに驚きと悲しみを示した」呂曉飛『中国古典散文集（二）』柳宗元篇 北京燕山出版社、2008年。
- <sup>12</sup> 大澤正昭『妻と娘の唐宋時代』東方選書、2021年、pp.30-31。
- <sup>13</sup> 大澤正昭（注12）に同じ（pp.70-75）
- <sup>14</sup> 李伯重「“男耕女織”与“婦女半边天”角色的形成——明清江南農家婦女労働問題探討之二」『中国經濟史研究』1997年 第3期
- <sup>15</sup> 張江『明代中後期的江南社会与社会生活』上海社会科学院出版社、2006年、p.23。
- <sup>16</sup> 「白娘子は次々と鶴童、東方朔、鹿鳴大仙を打ち破ったが、寿星の八卦雄黃陣で捕らえられた。白娘子は命乞いをし、仙草に助けを乞うた。寿星は、白娘子の宿縁がまだ尽きていないため、白娘子を解放し、仙草を与えた」方成培『雷峰塔伝奇』十七出 乾隆三十六年(1771年)刊
- <sup>17</sup> 「白娘子と青児は許宣を探して金山寺にやって来たが、法海は許宣を返すことを拒んだ。これにより、



- 白娘子と青児は法海と衝突し、水が金山を覆った」方成培（注16）に同じ（二十五出）
- 18 「婚嫁皆由祖父母，父母主婚，祖父母，父母俱無者，从余親主婚」（清）光緒「刑部・戸律婚姻」『大清会典事例』卷七五六
- 19 蓬敏哲「自梳女・女学生・武女——近代画報中女性形象的他者建构」『中国語言文学研究』春之卷2021年，pp.198-199。
- 20 傅学敏『国家意識形態与国統区戲劇運動』中国社会科学出版社，2010年，p.236。
- 21 高長虹著 山西省孟県政協『高長虹文集』委員会編『高長虹文集』下巻 中国社会科学出版，1989年，p.417。
- 22 高長虹（注21）に同じ（p.423）
- 23 端午節は旧暦の五月五日であり，春節や中秋節と共に中国の三大伝統節と呼ばれる。また端五，端陽と言い，春秋戦国時代に生まれ，漢代において広く伝わったと考えられる。
- 24 李紫貴著 劉乃崇編『李紫貴戯曲表導演芸術論集』中国戯劇出版，1992年，p.476。
- 25 董健『田漢評伝』南京大学出版社，2012年，p.446。
- 26 田漢『金鉢記』中華書局，1950年，p.26。原文は「原来这贼官果然沟通敌人，咱们这一来，倒给那贼官一个教训」
- 27 周恩来「關於戯曲改革工作的指示」『人民日報』1951年5月7日
- 28 「生活のため，白蛇は青蛇に命じて錢塘県の役所から五百両を盗ませた。実際は，この銀両は，知県が倭寇と内通し，受け取っていたお金である」田漢（注26）に同じ（p.22）
- 29 李紫貴（口述）満健蘭（整理）「田老写白蛇伝始末」『中国戯曲』1998年07期，p.41。
- 30 馮夢龍「白娘永鎮雷峰塔」『警世通言』上海古籍出版社，1992年，p.440。原文は「头戴孝头髻，乌云畔插着些素钗梳，穿一领白绢衫儿，下穿一条细麻布裙」
- 31 馮夢龍（注30）に同じ（p.439） 原文は「俊俏后生」
- 32 馮夢龍（注30）に同じ（p.440）原文は「平生是个老实之人」
- 33 法海は白娘子が蛇妖という事実を許仙に告げたあと，許仙は法海の話を信じて白娘子に雄黄酒を飲ませて，白娘子の正体を確認した。
- 34 田漢『白蛇伝』作家出版社，1955年，p.27。原文は「休说你不是妖怪，就是妖怪，卑人也是疼爱娘子的呀」
- 35 田漢（注34）に同じ（p.49）原文は「家可舍，娘子恩情难舍」
- 36 田漢（注34）に同じ（p.82）原文は「许仙今日心头亮，吃人的是法海，不是妻房，打碎金鉢把贤妻放」